

ういー・しんく

～研修報告 夏・冬～

子どもたちは、日々おもしろい遊びを展開しています。我々保育者は、子どもたちが主体的に活動を進めていく彼らの世界の中で、見守ったり、一緒に遊びに加わったり、時には提案したりもしながら、対当な立場で生活をしています。

1日の中で、あの対応は間違っていなかっただろうか？あの声かけは適切だったのだろうか？タイミングは？子どもたちの学びの芽を摘むことになってしまっていないだろうか？自然に出てくる言動を変えてしまうことになっていないだろうか？と…。私たちは、日々振り返り、その時その場にふさわしい言葉はなんだろうか？と問い続けています。

こうでなければならないという答えのない保育。子どもたちの世界にふさわしい者であるために、今年度も数々の研究会・研修会に足を運び、他園の取り組みや講師の先生の言葉からたくさんのヒントを得てきました。その一部を年間を通して報告いたします。

第4回 幼児教育実践学会**8月24日 福岡ガーデンパレスにて**

福岡県で行われた『幼児教育実践学会』で『生活の中での幼児と保育者の育ちを考える』をテーマに群馬大学の 茂木一司教授と共同で研究し、口頭発表をしてきました。前年度、関東地区研修大会で『3・4・5歳児の生活をふまえた学びの連続性を考える』をテーマに研究しました。その中で「幼児が主体的に遊び学んでいくために」は、「保育者や園が、幼児の育ちや声に合わせて、柔軟に環境を構成すること」が大切であると考えました。それを受けて今年度は、幼児が生活（遊び）を通して、多様な環境と関わる中で、保育者の変化にも着目して研究を進めました。年長児の事例を2つ挙げ、分析したことを基に、会場に来ていただいた方と意見交換をしながら考えを

深めてきました。

『幼児の主体的なあそび（学び）を

保障するために大切なことは何か』

子どもがやりたい活動を好きなだけ、自由にさせることが保障に繋がるわけではありません。子どもはあそびの中で、モノ・他者・自分と関わって（＝対話して）います。対話を通して発見したり、あそびを獲得したり、様々な気持ちを抱いたり、自分と向き合ったり…。「様々な対象物と対話することが大切で、その時間や環境を確保してあげたい。一方で時間はもちろん、対象物によって（資源や素材）は限りがあり、それらを大事に使うことも伝えたい。」という保育者の思い（保育者の主体性）があります。子どもも保育者も、対モノ・対他者・対自分と関わり、葛藤しながら生活しています。子どもも保育者も育ち合うためには、関わり合いの中で双方が（折り合いをつけながら）納得することが必要になってきます。そこで、

- 子どもの主体性と保育者の主体性とのバランスをはかりながら、ともにルールを作っていく保育
- その中で子ども自身が考え、選択・交渉できる環境を用意すること
- あそびを通しての発見や感情を抱くことを妨げないために、時間・空間・雰囲気のような目に見えないモノでの環境の再構成

が、大切ではないかと考えました。上記のことを念頭に置きながら、これからも子ども・保育者が共に育ち合える日々を過ごしていきたいと思います。

（ 細井 理美 ）

第17回 子どもと保育実践研究会 夏季全国大会**8月17～18日 東京家政大学にて****『保育新時代の幕開け』 Part I**

「あらためて『幼児期のふさわしい生活』を問う

～広島・かえで幼稚園の実践を通して～」

広島県にある「かえで幼稚園」の実践が映像を交えて紹介された後、その提案を通して「“大事なこと”

ってどこにある？」をキーワードに幼児期のふさわしい生活について考えるシンポジウムが行われました。

紹介された映像は、“遊びの中で育つ子どもたちの姿をとらえたい”という企画主旨から「あそんでぼくらは人間になる」というドキュメンタリー番組としてTVでも放映されたもの。普段の遊びの中の1つや運動会での年長組クラス対抗ゲームに子どもたちが自らチャレンジを重ねたり、自分たちで考え、取り組んでいったりする様子を取りあげられていました。子どもたちは挑戦することが大好きで、難しくければ難しいほど燃える…そんな様子が画面から伝わり、思わず清心幼稚園の子どもたちが遊ぶ姿を思い浮かべました。

「子どもたちは、“こうしたい”“こうなりたい”というエネルギー（様々な想い）をたくさん持っていて、それを〔発揮させる環境〕が大事であること。そのためには、子どもたち一人ひとりを丁寧に受け止め“できない部分”に焦点を当てるのではなく“できる部分・できようとする部分”に注目し、子どもたちが持つ〔可能性（無限大）を引き出す〕ことが大事であり、そのための知恵が保育者（大人）に問われている…」という言葉・投げかけが響きました。保育者として自分の保育を、母親として子育てを振り返ると、私自身反省し、思いを新たにしていきたい点でした。

幼稚園は子どもたちのもので、主役は子どもたちであることを忘れずに、＜大人がさせたい＞ではなく、＜子どもがなりたい・やりたい＞を大切に、一日一日を子どもたちと共に積み重ねていきたいと思えます。それと同時に、子どもにとって何が大事か、何を大事に保育をするかを日々の保育の中で、色々な葛藤と向き合いながら、こういう子どもの育ち（姿）が大事だと思う…と感じ、それを伝えていける保育者になりたいと思いました。（金子 恵子）

分科会

「ビデオカンファレンス

～子どもの世界をともに見る～

「ビデオカンファレンス」とは、参加者が共にビデオを繰り返し視聴し、その内容について意見を交わし合うことです。今回は、子どもたちが幼稚園で過ごす中の何気ない遊びの一場面を視聴し、そこでの子どもの本質をとらえようという趣旨で行われました。

一回目に見た映像から、私は「バラバラに遊んでいた数人の男の子たち、次第にそれぞれのイメージが繋がりみんなで船のごっこ遊びが始まった。」という全体の様子を捉えました。その後、ビデオカンファレンスをしていくうちに、私の考えが徐々に変化していき、子ども一人ひとりのストーリーが見えてきたように感じました。

A君は、友だちの輪から少し距離をおいています。あの子は、どうして遊びを見ているだけなのだろう…一緒に遊びたいのかな…という思いで見ていると、A君は船ごっこに入った途端、笑顔で遊び始めます。その時、彼の心の中に近付けたように感じました。

また、B君は、船ごっこの中に入っても、ずっと自分の電車遊びを貫いており、周りの友だちに電車を自慢しています。電車遊びに対する強い思いと、船遊びの中にある「B君なりの遊び」を捉えることができました。

一つの遊びに見えても、そこには子どもの数だけの物語があり、重なり合い、絡み合い、その一瞬が成り立っています。そこには、様々な人やものとの出会い、気持ちや行動の変化があり、子どもたちにとって大切な時間です。それを保育者は見逃さずに、一人ひとりの内面を丁寧に捉えることができれば、より深い幼児理解につながるのではないかと、子どもに対するかかわりも違ってくるのではないかと思います。

清心幼稚園では、保育者は学年の域を超えて子どもたちとかかわっており、また外部の様々な大人とのふれあいもあります。その良さを生かして、保育

者間に限らずに意見を交わし合い、多方向から子どもの内面を汲みとっていきましょうと思います。

(遠藤 翠)

子どもと保育実践研究会 冬季セミナー

1月11～12日 東京家政大学にて

『保育新時代の幕開け』 Part II

「遊びが学びであるということ」

○第一部

講演「遊びが学びであるということ」：河邊貴子先生

実践提案「火のある保育から」：中野圭祐先生

幼児期において、「遊び」が重要であるということは、ご存じとは思いますが、その捉え方は様々です。また、目に見える成果としては分かりづらいものです。なぜなら、子どもの「やりたい」という気持ちと保育者の「やって欲しい」という思いは、必ずしも一致しないからです。

今回、東京学芸大学附属幼稚園の実践提案に関する発表を聴かせていただく機会がありました。『天の火をぬすんだウサギ』という絵本から、“火をおこす”活動が始まったそうです。保育者自らが木と木をこすり合わせる道具を作り、何回も火おこしを練習したそうです。その姿から、子どもたちも火おこしを行い、そこからさらに料理、染め物、歌、踊り、劇と、様々な学びに広がった様子を見てきました。中でも、子どもたちの活動を支える人々の多さに驚きました。担任だけでなく、他学年の教員、保護者、学生、地域の「〇〇名人」と呼ばれるおじさんなど、火をおこす活動をきっかけに園内外に1つの大きなコミュニティーとなっていく様子に感銘を受けました。

そのコミュニティーの中で子どもたちが1つひとつの体験を通して、モノや人と関わっていくうちに、内面に培ったものが、子どもの中から表現される。このプロセスこそが『「遊び」が「学び」になる』ということなのだと思えました。

この研修を通して、「遊び」の中で「学ぶ」ことは、

幼児だけでなく、保育者も一緒なのだと思いました。そして保育者は、子どもたちの「遊び」を理解し、「遊び」が深まるためにより良い援助をしていくことが必要だと思いました。(堀口 和子)

○第二部 シンポジウム

実践を視聴された佐伯胖先生、三谷大紀先生が参加し、シンポジウムが行われました。そこでは、遊びの中から多くのことを学んでいること、人やモノの環境とのかかわりについて、考えさせられたとの感想がありました。

今回のシンポジウムでは、「体験と経験」、また、「保育されない権利」について、特に印象に残ったので次の通りまとめてみました。

「体験と経験」について、共著「子どもを『人間としてみる』ということ」の中で三谷先生は、このように書かれています。

「人は生きているかぎり『体験』を常にしている。しかし、それは、放っておけば忘れてしまうものである。子どもが心に残るような体験をした時、その体験が心に積み重ねられ、これからの自分の生きる営みに生かされていくようになったものが『経験』である。遊びを中心にした保育の中で、子どもが物事にじっくり向き合おうとしている姿、子ども自身が満足や実感を得ようとしている姿は大事であり、大切にしなければならない。保育者や大人がよかれと思ったかかわりや先回りした配慮が、そうした『体験』する時間を子どもたちから奪っている可能性がある。『もっとやりたい、もっと向き合いたいんだ！』と子どもが訴えている姿が大人の目には『こだわりの強い子』『手がかかる子』と映っている場合もある。『こだわり』は、その子がじっくり物事に向き合っている（あるいは、向き合いたいと訴えている）姿かもしれない。」

砂遊びやお家ごっこなどのさまざまな「体験」が「経験」として蓄積されているのですね。遊びの体験が大切ですね。

子どもには、保育されない権利もある
それは、外れる権利を保障すること

「保育されない権利」については、佐伯先生が話されていました。

実践提案の中で、二人の男の子がみんなの輪の中へは入らず、友だちが引き上げていなくなった炉に座り、何やら話をしていた場面がありました。

A : 鍋に火があたらぬねえ。
B : けむりのないところに行くんだよ、先生がさっき言った。
A/B : ……
A : みえないねえ。
A : まつぼっくり拾いにいく？
B : まつぼっくりは真ん中に置くんだよ、先生がさっき言った。
A/B : ……
A : ゆげで目が痛いよ。
B : けむりっていうんだよ。

「この二人の男の子のまなざし、そういった姿を大切にしたいんです。それは『尊厳』なんです。それを want だけやっていたら大変なんです。それは、人間の尊厳の want なんです。本当は、どの want なのか。本当は、その保育者と少し関わりたかったのではないかと。その want の裏側ですね。その一人ひとりの尊厳があつて、自己決定権があつて、自分があつてということに、全員でなくてもいい、そのある根底の叫び、心の苦しんでいる声を聴く。そういう子どもの叫びを大事にする」と。

チューリップ組の子どもたちも毎日の遊びの中で友だちやモノとじっくりかかわっている姿をお便りの写真で紹介しています。裏側の姿まで感じ取っていただきたいです。今回の研修や著書を参考に勉強させていただいたことを、これからの保育に役立てていきたいと思ひます。 (星野 尚美)

分科会

「プロジェクト的な保育を考える」

相模原市の RISSHO KID' S きらり(保育園)からの

実践提案がありました。当園は、超都市型・テナント施設でビルの一室が保育室、園庭は無く、すぐ近くの伊勢丹裏の公園がその代用となるようです。都市に生まれ、生活していく子どもたちだからこそ、都市機能を使いこなせることが大切であり、それが使命と捉えているそうです。

ある日、5歳児の「本物の魚が見たい」というつぶやきをきっかけに、ロマンスカーに乗って江ノ島の磯へ出かけることになりました。ある子は、割り箸を何本も繋げ、その先に紙コップをつけた手作りの竿をもって…。釣りプロジェクトのはじまりです。手作り釣り竿がうまくいかず、地元のダイバーさんに釣り具屋へ行くことを提案される→本物の釣り竿で本物の魚を釣る→シュノーケリングをする→魚料理をする(三枚におろす)等々、子どもたちは多様かつ豊かな本物(モノ)に触れ、様々な専門分野の人(ヒト)と出会い、物語が展開されていきました。もちろん、それらのかかわり方には個人差がありました。保育者は、その時その時の子どもたちの夢を叶えるために、真剣に向き合っていく様子が伝わってきました。

青山学院大学の小林紀子先生より、「子どもたち一人ひとりのつぶやきから、どのようなプロジェクトがつくられていくのか、そのプロセスが大切である」という言葉に共感しました。子どもの素直なつぶやき、音声だけでなく仕草や表情も含めて全てをキャッチし、次の保育に繋げていきたいと思ひました。

きらりの園長先生が、「夢」という言葉を何度も使われていたのが印象的です。「園は、子どもの思い・“夢”を叶えられる場所でありたい」と。

みなさんの“夢”は何ですか？私たち大人も“夢”を抱き続けたいものです。自らの生き様を通して、子どもたちに生きることの楽しさを伝えていきたいですね。 (関根 留美子)

講演「子どもを『人間としてみる』ということ」

: 佐伯 胖先生

今回も、佐伯先生の話は深く難しかったです。

『子どもが見せるおどろくほどの素晴らしさ、みごとさ、崇高な尊厳を的確に感じ取るためには、子どもを「人間」としてみる必要がある。そのために、そもそも人間とはどういう存在なのかを根底から考えていかねばならない。』これらを三つの観点から捉えていきました。

◆人間は道徳的存在である

「いじわる」「親切」といった経験が無い赤ん坊でも、道徳的に「よい行い」「悪い行い」を判断する力を生まれながらに持っている。

◆人間は間柄的存在である（訴えを聴きあう関係性）
子どもは「思い、願い」がある。「欲求」をそのまま受け止めるのではなく、背後の「願い（訴え）」に傾聴すること、「互い（相手と私）」が関わり合う（＝対話）。

◆人間は他者を気づかう存在である

相手の訴えに傾聴し、応答し合う（＝対話する）対象であること（＝二人称的関わり）。赤ん坊にも「心」はあり、相手を「応答し合う対象」として見ている。
※現代は、互いを気づかいあう関係性が希薄。「仲間か赤の他人」、「〇〇が一緒（同調確認）＝仲間」という関係（＝一人称的関わり）の「安心社会」である。

「二人称的関わり」については、「子どもが、世界やモノ、コトと、ゆっくりじっくり関わる。子どもの声を傾聴（聴き入る、目で見る、話す）する。相手の目線に合わせ、そこにことばを添え、一緒に物を見る。」と具体的な話もありました。

三つの観点から、人とヒト、モノ、コト等の「関わり合い」が大切であり、「関わり合う」とは、とても奥が深いということ、「子どもを人間として見る」ために「二人称的関わり」が大事なのではないかということを感じました。大人になるにつれて、つい子どもに「〇〇してごらん。」と投げかけたり、理論や解釈に当てはめようとしたりし、情緒的理解に欠けてしまうことがあります。この「二人称的関わり」を意識しながら、これからも子どもと関わり、私自身が学ばせてもらおうと思います。

研修後、改めて内容を振り返りたいと思い、図書「子どもを『人間としてみる』ということ」（ミネルヴァ書房）を読んでいるところです。興味がある方、わかりやすくおすすめですよ。

（ 秋山 恵子 ）

—終わりに—

子どもたちは、将来のための「今」ではなく、「今現在」を生きている存在なのだと感じています。彼らの今は、将来のための準備期間ではありません。

自分たちの世界でやりたい遊びを見つけ、自分の目的を見つけ、挑戦し、「今」を楽しんでいます。それを支えているのは、やりたいことが見つけられる環境と、存分に遊べる時間と、友だち、見守っている保育者の共感のまなざし等が保障されていることなのかなと思います。幼稚園がそういう場であり続けるよう、共に「今」を生きる存在として真摯な姿勢で過ごしていきたいです。

今を存分に生きることの積み重ねが、この先待っている未来がどんなものであろうと強く逞しく生きていける力になることでしょう。